

『みやぎの社会科教室』一九六一年六月（東京書籍）

## 相談室

解答者

「新しい社会」編集委員

矢口 新

小学校の歴史指導は、時代史的な取扱いをすることに重点がおかれていますが、問題史的な取扱いも必要と考えられます。両者の関係をどのようにふまえて指導したらよいでしょうか。

答 質問者の言う時代史的取扱いというのは古代から中世、近世と順次に古い時代から、歴史的事象を取扱って行くということの意味していると思われるが、これは小学校の六年程度ではじめて歴史を学習する場合はまず妥当な方法と

いふべきであろう。消え去った過去が何であったかをまず見ることが最初に行われなくては何かを考えるにも不便だからという意味があると思われる。

質問者の言う時代史的取扱いとはちがった方法としては、倒叙という方式もあるが、即ち現代から過去へさかのぼるという方式もあるが、これは因果関係という見方がかなり発達して、歴史的因果が考えられるようになり現代の諸々の現象をみて、その由来をさぐるということが意識されるようになってこないとうまくやれないであろう。過去から現代をごく大ざっぱに因果関係でみることは出来ても大ざっぱではとても倒叙という見方の本格的なものは成り立たない。すぐ説明に困るようなことになら出発するというのはかなりむずかしいことがわかるようになってからだと思ふ。やさしい程度でや

るのなら、別に倒叙でなくともかまわない。過去と現在のちがいのあらましがわかるという取扱いならば、質問者の言う時代史的取扱いで十分出来ると思ふ。

問題史的取扱いが必要だと考えられると、質問者は言っておられるが、問題史というのは、本質的には、倒叙の場合とおなじように現代の問題がわかり、それが成立する歴史的因果関係についての理解がかなり高度でなければむずかしいのである。小学校の六年の程度では、現在の問題がまず把握出来ないと考えられるから、本当の意味の問題史は到底なり立たないと言ふべきではないか。

質問者の言う問題史的取扱いというのは、問題史そのものでなく、気持ちを言ったものと考えられるが、気持ちの上では、現代の問題へ結びつけようとするということには常に大切である。否歴史そのものがその意味では現在から出発しているのである。われわれのもっている問題が過去をその問題に応じて取扱わせるのである。例えば

今われわれは民主的な社会の建設の方向にむかって生活しているし多少なりとはいえそれを実現しているから、そういう物の見方で、過去をみるのである。古代の社会をみても、その見方で見るから、現代とちがいがわかり、古代という時代がわかる。また中世もその見方でみて、現代を基準にして、古代と中世とを現代というものさしで比べて、古代と中世のちがいもまた明らかになるのである。こうして時代がわかるということが成立する。小学校六年の程度では、現代についても、ごく大まかな把握だから、それに応じて、過去のとらえ方もごく大まかに各時代の特色をとらえるべきであろう。

時代史的取扱い、問題史的取扱いというように、取扱いに二つの方式があるように考えないで、考え方の問題として考えた方がよいのではないか。今の教科書に従つて、しかも常に現代の社会のあり方と比較をしながら、各時代をとり扱うというやり方である。古代と現代、中世と現代の比較から、

それぞれの時代をつかみ、それがまた古代から中世への移り行きも現代をものさしとして理解させるものになる。それはある意味の問題史的取扱いである。

歴史上の人物の取り扱いについてはC・O・Sの留意事項に示されていますが、現場ではややもすると、安易な考え方で流しやすい傾向にあります。具体例をあげて人物の取り上げ方や指導の実際についてご教示ください。

答 質問者が言う安易な考え方に流れやすいというのはどういうことであろうか。その辺がよくわからないので、回答がピントを外れるかも知れない。

指導要領には人物中心の歴史にならぬように注意がなされているが、これはどういうことだろうか。人物を中心にして歴史を考えると、いうことは恐らく歴史のうちでも最もむずかしいことに属するのであるまいかと私は考える。よく言われるように、時代は人物をつ

くり、人物は時代をつくるということは一般的には確かにそうである。だがこのわかったようなわかってぬような言葉も、具体的にはわからないことである。例えば福沢諭吉という人物をとりあげて、福沢という人物が、封建末期の中津藩の中から、――いまでもそう大して文化の進んだ地域ではない大分県といつては土地の人に気の毒だが――そういう所からどうして世界の進運を理解して、いちはやくアメリカへ渡り、後に日本の文明開化のリーダーになったのか、これだけでもなかなか解きにくい問題である。そういう人物につくりあげたのは確かに時代であるにちがいない。けれども、時代がつくったといったのでは、わからんことをわからないままにしておくということ以上には出ていない。わかるようにしようと思えば、彼の生涯の環境という具体的なものの中にあらわれている時代、例えば少年時代の家庭生活、そこへしみこんで来ていた時代の波、そういったものを明らかにして、そこか

ら、彼の少年から青年時代へかけての思想の形成を見てみる必要がある。これはなかなかむずかしいことであることは皆さんも同意するであろう。

福沢が時代をつくったというのもなる程そういえば間違いないことのようにだが、さて、それは具体的にどういうことだろうか。例えば彼の書いた「学問のすゝめ」という本が、非常に多く読まれて、今でいえば当時のベストセラーであったということも、その一つの要因であったと思う。彼が戦争中も後に慶応義塾となった三田の塾で洋書を論じて、明治時代に日本の各界で活躍した人物を養成したというのも時代をつくったことの一つであろう。しかしそういうように人々が彼に師事して彼の教えの通りに働いたのもまた時代といえは時代である。その意味では、時代が彼をのしあげていったのである。

われわれが歴史の中の人物というときは、結局はこうした時代がつくり、時代をつくり、時代の中

で、のしあげられた人物をとりあげているのである。人物がわかって、それを通じて時代がわかるようになれば、恐らく、時代が最もよくわかるし、歴史も最高のレベルまでわかるということであろう。これは子供にむずかしいということではないだろうか、少なくとも、人物を中心にして、歴史を見ると、いうのでは子供は、何のことかわからない世界にひきずりこまれるであろう。

子供には、人間というものがそこまで分らないから、人物中心の取扱いは無理というべきである。しかし、時代を多少とも理解させることを考えるならば、その時代の中で、のしあげられた人物を取扱うことは必要であるし、そういう一種の象徴的な人物を取扱って各時代と現代のちがいを明らかにし、従って時代の特色を明らかにすることはたいせつなことであると思われる。